

『伊勢物語』の世界

—成立と享受—

山本登朗

平成21年10月1日から31日まで、総合図書館1階の展示室で、秋季特別展「伊勢物語の世界」が開催された。それにあわせて、10月20日には、図書館ホールで、私が講師となって、記念講演会「『伊勢物語』の成立と享受～展示品を中心に～」も行われた。以下は、その講演内容に即しながら、展示品・館蔵品を中心にして、あらためて『伊勢物語』の成立と享受についてまとめたものである。

1 『伊勢物語』の成立と写本

『伊勢物語』は、日本の古典文学を代表する作品として、長い時代にわたって広く読まれ続けてきた。その内容は、さまざまな面で、後続して成立した『源氏物語』にも大きな影響を与えている。

その『伊勢物語』は、9世紀の終わりごろ、まずいくつかの章段が、おそらくは主人公のモデルである在原業平本人によって書かれ、その後、それを母胎にして数多くの章段が、複数の作者によって書き加えられ、また既成章段の増補改訂などもおこなわれて、10世紀の後半頃には、ほぼ現在の姿になったと考えられている。

しかしながら、そのような成立過程の中間段階で書かれた『伊勢物語』の伝本は、残されていない。というよりもそもそも、平安時代に書き写された『伊勢物語』の伝本は、おそらくはかつて大量に存在していたと考えられるのに、現在はわずかに断簡一葉を除けば、まったく残されていないのである。このような事情は、『伊勢物語』だけでなく、『源氏物語』などの他の物語についても、ほぼ同様である。一方で、たとえば和歌の歌集は、『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集だけでなく、私家集と呼ばれる個人の歌集などについても、平安時代書写の伝本が少なからず残されている。このような相違は、なぜ生じたのだろうか。

和歌は、勅撰和歌集が作られた、すなわち天皇の命令で歌集が編集されたことからわかるように、

平安時代にはすでに公的な価値を持った文学、ハレの文学として認められていた。それに対して物語は、あくまでも娯楽的な、非公式のサブカルチャーとして、おもに女性を中心とする私的な世界で楽しまれていたと考えられる。このような娯楽的な文学作品は当時「狂言綺語」と呼ばれ、仏教的な考えからも、人の極楽往生をさまたげる罪深い存在ともされていた。このような事情から、『伊勢物語』や『源氏物語』を書き写した写本は、持ち主の罪を清めるため死後に焼却されたり、新しい紙に漉き直されて経典の料紙につかわれたりして、その多くが消え去っていったと考えられる。そのように処分されない場合でも、ハレの文学でない娯楽ものの物語の写本は、大切に保存する対象とは考えられず、現代のマンガ本のように、消耗品のように扱われることが多かったと考えられる。

このような事情は、貴族の時代である平安時代が終わりを迎え、武士の時代が到来するに及んで、大きく変わるようになった。平安和歌を生み出した貴族の時代が終わり、荒々しい時代になっても、身分の高い人々は和歌を読み続けたが、その母胎である貴族社会はもはや昔の姿を失っている。その失われた現実に代わるものとして、物語が重視されるようになった。藤原俊成の「源氏読まぬ歌詠みは遺恨のことなり（源氏物語を読んだことのない歌人がいるのは残念なことだ）」という発言は有名だが、事情は『伊勢物語』についても同様であったと考えられる。物語はもはやサブカルチャー的な娯楽ではなく、歌を詠む者が学ばなければならない、一種の教科書となったのである。鎌倉時代初頭以後に書かれた『伊勢物語』や『源氏物語』の写本は、それまでとは一転して、現在もかなり多く残されているが、それは、このような事情によるものと考えられる。

2 二種類の『伊勢物語』

平安時代にサブカルチャー的な娯楽として楽しま

れた時、『伊勢物語』や『源氏物語』は、その本来の姿のままの、いわば生きた形で読まれていた。まだ規範的な教科書として固定していなかったそれらの物語は、時には読者によって書き改められたり、部分的に修正されながら書写されたりすることも多かったと思われる。『伊勢物語』や『源氏物語』には、このようにして、さまざまに異なった、何種類かの本文(異本)が広まっていたと考えられるのである。鎌倉時代になって、物語が教科書として読まれるようになると、人々は『伊勢物語』や『源氏物語』の異本の存在に気付き、どれが正しい本文なのかを考え始めるようになった。『伊勢物語』についても、章段の配列が違う7種類の伝本が存在するという伝承も伝えられているが、その真偽はさだかでない。

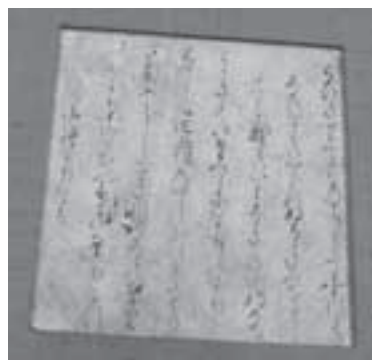
そのような中で、平安時代の終わりから鎌倉時代のはじめにかけて、2種類の『伊勢物語』が存在していたことは、顕昭の『古今集注』などによって、間違いのない事実として確認することができる。そのうちのひとつは、「昔、男、初冠して…」という、主人公の元服の記述から始まり、主人公の臨終の段で終わる、いわゆる「初冠本」で、現在数多く伝えられている『伊勢物語』伝本のほぼすべては、この種類の本である。ところが、平安の終わりから鎌倉のはじめごろまで、「初冠本」とは異なった種類の『伊勢物語』が存在していた。それらの本は、主人公が狩の使いになって伊勢に行き、伊勢神宮に仕える神聖な女性である「斎宮」と一夜をともにすごすという、定家本の第六十九段にあたる章段が冒頭に配列されていたため、一般に「狩の使本」と呼ばれ、また、和泉式部の娘である小式部内侍がこの形の『伊勢物語』を所有していたという伝承によって「小式部内侍本」とも呼ばれている。

この時代、父の俊成の跡を継いで、天才的な歌人として和歌の世界をリードしていた藤原定家は、その立場上、和歌のための参考書であった『伊勢物語』や『源氏物語』について、数多くの異本の中から正しい本文を選んで人々に推奨する必要に迫られていた。当時実在していた2種類の『伊勢物語』のうち、定家を選んだのは「初冠本」であった。一方の「狩の使本」(小式部内侍本)について定家は、定家本『伊勢物語』(根源本)の奥書の中で、藤原伊行が作った偽物だと、激しくののしっている。すぐれた古典研究家でもあった定家の意見は大きな権威を持つようになり、これ以降、和歌の指導者の家が定家の子孫によって占められたこともあって、2種類の『伊

勢物語』のうち、定家が支持した「初冠本」が広まって、一方の「狩の使本」は次第に姿を消していき、その結果、現在ではもはや見ることができなくなったと考えられてきた。

ところが、昭和61年に、この「狩の使本」(小式部内侍本)の一部と考えられる断簡が一葉、発見され、顕昭の『古今集注』などの記載と一致することから、まぎれもない「狩の使本」の一頁であることが確認された。

このような断簡は、一般に「古筆切(こひつぎれ)」と呼ばれる。室町時代の後半以降、茶道の流行に従い、床の掛け物に使う必要もあって、数多くの古い写本が、料紙ごとにはばらばらにされ、さらには切り離され、表裏も剥がされて、一枚ずつの断簡の形で売買され鑑賞された。近年、それら古筆切の研究が盛んになり、ツレと呼ばれる、本来同じ本の一部であった断簡を集めることによって、解体・切断される以前の原本の本来の姿が復元できるケースも増えてきた。「狩の使本」(小式部内侍本)の断簡についても、その後ツレが発見され、現在はその2枚《写真1》《写真2》が、「狩の使本」(小式部内侍本)が間違いなく実在したことを示す、まことに貴重な資料「小式部内侍本伊勢物語切」として知られている。



《写真1》



《写真2》

これらの断簡が発見される以前は、藤原定家の激しい批判もあって、「狩の使本」（小式部内侍本）の価値については、これを偽作として否定的に見る意見が強かった。しかし、「初冠本」が元服から始まって臨終で終わるという形を持ち、少なくとも最初と最後だけは主人公の一生の順序に従って章段が配置されていると思われるのに対して、「狩の使本」（小式部内侍本）の章段配列には、ほとんど整理した跡が見られない。乱雑なものや整理されたものがある場合、一般に前者の方が古い形を留めていると考えるのが普通である。また、「狩の使本」（小式部内侍本）は伊勢を舞台にした章段から始まっており、『伊勢物語』という名称の由来を考えるうえで、大変に好都合でもある。このような事情を考えれば、「狩の使本」（小式部内侍本）こそが『伊勢物語』の原形であり、それを編集し直したのが「初冠本」であったのではないかと考えられてくる。2枚の断簡が発見されてからは、そのように考えて「狩の使本」（小式部内侍本）を評価しようとする意見が次第に強まってきている。

3 さまざまな写本

上述の2種類の『伊勢物語』のうち、鎌倉時代以降多く用いられたのは「初冠本」だったが、同じ「初冠本」にも、さまざまな種類の本文があった。「初冠本」を正しい『伊勢物語』として認定した藤原定家は、そのような中から、信頼できる伝本をもとにして、他の伝本や自分の見解をもふまえて校訂し、家の「証本」とも言うべき本文を作り出して、子孫に伝えるとともに、人々の求めに応じて書写させたりしていたと考えられるが、その本を一般に「定家本」と呼んでいる。鎌倉時代になってもしばらくの間は、「定家本」以外の「初冠本」が広く用いられていたようで、『和歌知頭集』をはじめとする『伊勢物語』古注も、「定家本」以外の本を底本にして、注釈を加えている。

やがて、和歌の指導者の家が、定家の子孫である二条、京極、冷泉の三つの家によってほぼ独占されたこともあって、定家の権威も強まり、定家本『伊勢物語』が次第に多く用いられるようになってゆく。定家の独特の書体は定家様と呼ばれて尊ばれるようになったが、その子孫である冷泉家の歴代の当主は、この先祖の書体を学び、定家様の文字を意図的に書いていた。本図書館所蔵の「伊勢物語 伝冷泉為満

筆」は、『伊勢物語』の写本には珍しい袋綴横本。確証はないが冷泉為満筆と鑑定されており、文字も定家様で書かれている。伝承筆者の冷泉為満は、永禄2年（1559）に生まれ、冷泉家の当主として正三位権大納言に至り、元和5年（1619）に没した。また同じく本館所蔵の「伊勢物語 伝飛鳥井雅賢筆本」《写真3》には、本文の行間や余白に数多くの注釈が書き入れられている。『伊勢物語』の写本には、このような注釈書き入れ本が多い。この本の伝承筆者である飛鳥井雅賢は、天正12年（1584）生、勅勘によって隠岐に流され、寛永3年（1626）にその地で没した。



《写真3》

定家による『伊勢物語』の校訂は、その日記『明月記』の記載からも、何度もくりかえし行われたことが知られているが、現在、そのうちの数種類の本の伝本の現存が知られている。それを見ると、いくつかの箇所では本文の異同があり、定家本の中にも複数の本文のあったことが知られる。そのうち、天福本・武田本・根源本（流布本）の3種類がよく知られており、現在にまで伝えられている『伊勢物語』写本のほとんどは、この3種類の本のどれかをもとにして書き継がれた本か、3種類の本が混合した本文を持つものである。室町時代の後半以降には、定家がそれらの本に書き付けた3種の奥書をすべて集めて並記した本も作られた。本館所蔵の「伊勢物語 伝九条植道筆本」もその一つである。伝承筆者の九条植道は、永正4年（1507）生。母は、宗祇から古今伝授を受けた当時第一の歌人学者である三条西実隆の娘。天文二年に関白となり、文禄3年（1594）に88歳で没している。

4 「嵯峨本伊勢物語」の出現

このように、『伊勢物語』はながらく写本の形で

読まれ続けてきたが、慶長年間(1596～1615)に「嵯峨本伊勢物語」が版行され、『伊勢物語』も版本の時代を迎える。木版による印刷そのものは、日本でも古く奈良時代から行われていたが、その対象は仏教や儒教の経典など、教化や啓蒙に役立つ、いわば社会的に有用な文献や書物に限られていた。この時期になってはじめて、趣味や娯楽、ないしは教養の書ともいべき和歌や物語が印刷されるようになったのである。当時、キリシタンの宣教師によってヨーロッパの活版印刷の技術が日本にもたらされ、実際にキリシタン版と呼ばれる印刷も行われていた。また一方、文禄慶長の役を機会に、朝鮮でおこなわれていた活字印刷も日本に導入された。そのような新しい技術を背景に、川船による物資運搬ルートの開発で豪商となった角倉了以の息子素庵によって、木製の活字を用いた、「嵯峨本」と呼ばれるさまざまな版本が版行された。素庵の周囲には、中院通勝や本阿弥光悦など、当時を代表する文化人や芸術家が集まっており、彼等の手によって、あくまでも非営利的に作られた豪華本が「嵯峨本」であったと考えられている。

「嵯峨本伊勢物語」は、そのようなさまざまな「嵯峨本」を代表するものと言ってもよいが、その、はじめて印刷された『伊勢物語』は、当初から絵を伴った絵入り本でもあった。『伊勢物語』の絵画化の歴史は古く、その成立の時点から絵を伴って鑑賞されていたという説もあるが、『源氏物語』にはすでに『伊勢物語』の絵が登場しており、そのころにはすでに『伊勢物語』が絵とともに鑑賞されていたことが確認される。現存する『伊勢物語』の絵巻や絵入り本の数は少ないが、それらの作品によって、鎌倉時代・室町時代を通じて、数多くの『伊勢物語』の絵巻や絵入り本が存在していた様子がうかがわれる。絵を伴った「嵯峨本伊勢物語」は、このような歴史を背景にふまえる形で、絵入り版本として刊行されたのである。

雲母を引いた5色の色変わり料紙に、美しい書体の木活字で本文を印刷し、質の高い挿絵を加えた「嵯峨本伊勢物語」は、人々からきわめて高い評価を得て、大いにもはやされ、そのため数度にわたって刷り直されたが、さらに需要に応えるために、嵯峨本の版面を、活字を使わず一枚の版木にそのまま覆刻した整版本も作られた。本館所蔵の「伊勢物語 嵯峨本覆刻本」《写真4》は、その覆刻本に、手書きによる彩色を加えて商品価値を高めようとしたと

考えられる本。江戸時代初期の版本には、手書きで素朴な彩色を加えたものがしばしば見られ、赤と緑の2色が多く用いられていることから「丹緑本」と呼ばれているが、本書の彩色は色数も多く丁寧に施されており、その点、一般の丹緑本とは様子が異なっている。また、『伊勢物語』の嵯峨本や嵯峨本覆刻本に彩色が加えられている例はきわめて珍しい。なお、本書には最後の臨終の段の絵だけが省かれており、何らかの祝い事に用いるために作成された彩色本であったかとも考えられる。



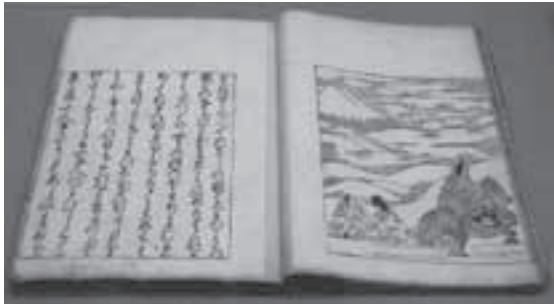
《写真4》

5 版本の展開

江戸時代は『伊勢物語』がもっとも多くの人々に愛された時代であり、その流行の中で、商業出版の成立とともに、『伊勢物語』の絵入り版本が多数出版されるようになる。『伊勢物語』最初の版本であった嵯峨本は、非営利的に出版されたと考えられるが、その影響はきわめて大きく、初期の『伊勢物語』版本の挿絵は、ほとんどが嵯峨本の模倣であった。本館所蔵の「伊勢物語 万治2年(1659)版本」《写真5》は、その典型的な一例であり、挿絵には素朴な味わいが残っている。

やがて元禄年間(1688～1704)になると、浮世絵師の祖と言われる菱川師宣(～1694)によって、それまでとは異なった挿絵が描かれ、『伊勢物語』版本の世界は大きく変容してゆくことになる。師宣の絵は、嵯峨本の構図を使いながら、特に人物の描写などに新しい要素が多く見られ、当世風の雰囲気をも漂わせたものとなっている。「伊勢物語頭書抄 延宝7年(1679)版本」《写真6》は、延宝2年(1674)に版行された最初の頭書(頭注)本『伊勢物語』の頭注をほぼそのまま使い、挿絵を菱川師宣のものに改めた本である。師宣の絵は、このように頭注本に

も用いられるまでに、広く人気を博していたと考えられる。



《写真5》



《写真6》



《写真7》

この時期には、前述の「伊勢物語頭書抄」以外にも、さまざまな形態の注入り版本が版行されている。たとえば「伊勢物語絵抄 元禄6年（1693）版本」《写真7》は、頭注部のスペースの半分に絵を入れ、下の本文の理解に役立てようとした本。すべての丁に絵があるため、絵の数は103図ときわめて多く、その中には嵯峨本に見られない絵も多く含まれている。頭注だけでなく、下段の本文には傍注も付けられており、一種の通俗的注釈書となっている。さきに述べた師宣の絵からも、この「伊勢物語絵抄」の傍注からも、『伊勢物語』が単に古典文学としてだけでなく、次第に通俗的な読み物としても享受され始めたこの時代の雰囲気をつかむことができる。

師宣の時代からさらに進んで、延享（1744～1748）・宝暦（1751～1764）のころになると、『伊勢物語』版本の挿絵はさらに浮世絵的になり、描かれている人物や情景にも当世風のものが多くまざるようになる。絵の数は減少し、中には見開きの絵もあって、しかも該当する本文と無関係の位置に置かれており、『伊勢物語』版本が本文を読むためのものではなく、絵を楽しむためのものになりつつあることがわかる。本館所蔵の「改正伊勢物語 延享4年（1747）版本」《写真8》は、美人画を得意とした京都の浮世絵師、西川祐信が挿絵を描いている。人物は大きく描かれ、その表情は浮世絵の登場人物に近い。



《写真8》

西川祐信の挿絵の画風を受け継ぎ、さらに展開したのが上方浮世絵の中心人物であった月岡丹下（～1786）である。彼が挿絵を描いた「絵入伊勢物語 宝暦6年（1756）版本」《写真9》の画風は西川祐信に近く、京都ではすでに故人となっていた祐信の名のもとに版行されているが、丹下の絵には祐信の絵よりも一層大胆な当世風の雰囲気のみがみまわっている。丹下は、『伊勢物語』版本の挿絵よりも前に、『伊勢物語』を素材にしてかなり自由に翻案した絵本『絵本龍田山』を出しており、その経験が『伊勢物語』版本の大胆な挿絵となってあらわれていると言えよう。前年の宝暦5年（1755）には、その『絵本龍田山』に『伊勢物語』本文を加えた絵入り『伊勢物語』も版行されているが、絵入り『伊勢物語』版本の世界は、こうして次第に翻案・見立て・やつしを伴った絵本や浮世絵の世界に接近し、新しい版の制作はやがておこなわれなくなるのである。本館所蔵の「新板絵入伊勢物語 天明7年（1787）版本」《写真10》の挿絵は、下河辺秋水の画。下河辺秋水は、月岡丹下に続いて三種類の『伊勢物語』版本の挿絵を描いている。



《写真 9》



《写真 10》



《写真 11》

一方、元禄時代以降、『伊勢物語』本文の上段に、『源氏物語』の梗概や三十六歌仙の歌などの他の文学作品や、さまざまな常識・教養を絵入りで加えた形の版本が多数版行されている。1冊で『伊勢物語』だけでなくさまざまなものも学び楽しむことができるというものだが、その姿から、当時の人々が『伊勢物語』に何を求めていたか、その志向性をうかがうことができる。本館所蔵の「増補絵抄花王伊勢物語 元文3年(1738)版本」《写真11》は、「女子」のために作成したと刊記に記されており、事実、上部には、女性のための実用的な内容が多く加えられている。『伊勢物語』をはじめとするみやびな古典文学、そして優雅な世界の知識や教養が、女性のための教養と考えられるようになった時代の傾向を、

このような書物の姿は如実に示していて、ジェンダー的な視点からも興味深い。つい最近まで、全国の多くの女子大や女子短大には、かならず国文学科が設置されていた。日本の古典文学と女性のつながりは、明治維新を越えて、昭和や平成にまで続いたのである。

5 注釈書の歴史

平安時代末から鎌倉時代のはじめにかけて活躍した歌人である顕昭の『古今集注』などの著作に、何箇所かにわたって『伊勢物語』についての記述が見られることは、本論の冒頭でも述べた。また、藤原定家が校訂した定家本『伊勢物語』には、その本文の行間のあちらこちらに、登場人物の略歴をはじめとする簡単な注記が記されている。これらは、現在知られうるかぎりでは、もっとも古い『伊勢物語』についての注釈であると言ってよい。

だが、このような断片的な注記ではなく、『伊勢物語』全体の読解を示す特異な内容の注釈(書)が鎌倉時代になると、やがて出現する。すなわち、まず『和歌知頭集』という名の『伊勢物語』注釈書が作られ、それとは別に「冷泉家流古注」などと呼ばれる一群の注釈も生み出された。これらは、『伊勢物語』の背後にある隠された事実を暴露するという姿勢で書かれているが、その内容には歴史的事実とはかけ離れた荒唐無稽なものが多く、引用文献もほとんどが偽作である。それにもかかわらず、これらの注釈は室町時代中期まで広く読まれ、謡曲などに大きな影響を与えた。当時は、心敬や世阿弥のような一流の知識人に至るまで、多くの人々がそのような注釈を通して『伊勢物語』を読んでいたものであり、その痕跡は、現在もしばしば上演されている「井筒」や「杜若」などの謡曲にも、はっきりと残っている。以下の時代の注釈と区別するために、これらの特異な内容を持つ注釈を「古注」と呼んでいる。

本館所蔵の『伊勢物語知頭集』《写真12》は、『和歌知頭集』に属する注釈でありながら一部に「冷泉家流古注」の内容も含んでおり、一般の『和歌知頭集』とは異なった特異な内容が貴重な本で、なお今後の探究が待たれている。

室町時代中期になると、時代を代表する学者であった一条兼良(1402~1481)が、このような古注を否定し、『伊勢物語』の本文を尊重して歴史的事実を重視する注釈書『伊勢物語愚見抄』を書いた。

これ以後の注釈を、「古注」と区別して「旧注」と呼んでいる。連歌師の宗祇は、兼良にも学びながら、美濃国郡上八幡を本拠とする文武両道の武将東常縁から伝授を受け、物語作者の作意を重んじる、新しい注釈書の歴史を開いた。その流れは「古今伝授」とともに伝えられ、やがて宮中にも入り、江戸時代の末期まで続いている。



《写真 12》

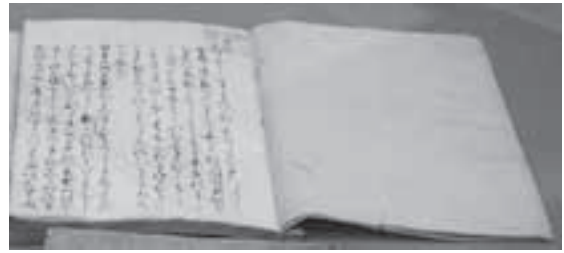
本館所蔵の『伊勢物語闕疑抄 無刊記版本』《写真 13》は、武将として名高い熊本細川家の先祖、細川幽斎が書いた注釈書。古活字版で何度も印刷され、その後整版本の形で版行されて世の中に広まった。文武両道にすぐれた幽斎は、宗祇から三条西家に伝えられた「古今伝授」を三条西実枝から伝授されたが、それをまだ誰にも伝えずにいる間に関ヶ原の合戦が勃発し、東軍に属した幽斎は舞鶴（田辺）城で西軍に包囲されて死を覚悟した。その死によって「古今伝授」が途絶えることを心配した後陽成上皇は、何度も勅使を送って幽斎を説得し、結局幽斎は城を出て、その命は助けられた。



《写真 13》

その一方で、江戸時代になると、中世的な学問を否定して、より実証的な考察を求める、「国学」と呼ばれる新しい日本学が出現し、『伊勢物語』研究も大きくその姿を変えてゆく。大阪が生んだ偉大な学僧、契沖の『勢語臆断』は、その出発となった注釈書である。本館所蔵の『勢語臆断 享保 14 年（1729）写』《写真 14》は、一般に広まっている『勢語臆断』とは本文が異なる貴重な本であり、契沖が

何度も推敲を重ねた姿を示すと言われている。



《写真 14》

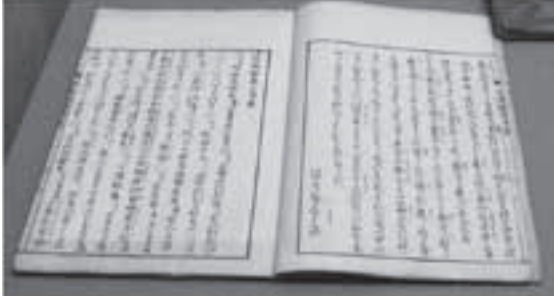
これまでの古典学を否定し、実証的な考察によって新しい注釈を作り上げようとする契沖の姿勢は、伏見稻荷神社の神主であった荷田春満の『伊勢物語童子問』に、より鮮明な形で受け継がれた。『伊勢物語童子問』は、童子と師匠の問答の形を借りて、当時広く読まれていた『伊勢物語闕疑抄』の注記を取り上げ、その一つ一つについて厳しい批判を述べながら、自分の説を主張しているが、特に、『伊勢物語』を事実とは無関係な虚構の物語として読もうとするところに大きな特徴がある。これら国学者によって書かれた注釈を「新注」と呼んでいるが、その流れは、荷田春満の孫弟子にあたる賀茂真淵の『伊勢物語古意』、本居宣長の流れを引く藤井高尚の『伊勢物語新釈』へと続き、近代の国文学の世界にまで大きな影響を与えている。

6 パロディーと偽書

代表的な古典文学として重んじられ、また特に江戸時代には庶民からも広く愛された『伊勢物語』は、だからこそ一方ではさかんにパロディーの対象とされた。江戸時代初期に『伊勢物語』をもじって作られた『仁勢物語』は、「昔、男」ではなく「をかし、男」で始まる各章段で、卑俗・滑稽な話を語って、『伊勢物語』の雅の世界を俗の世界に変えている。この種のパロディーは、これ以外にも、当時さかんに行われていた。

本館所蔵の『旧本伊勢物語 明和 6 年（1769）版本』《写真 15》は、建部綾足が、自らの学識を傾けて作った偽の真名本。本来の真名本は、定家本に否定的だった賀茂真淵によって重んじられた漢字表記（一種の万葉仮名）を用いた『伊勢物語』伝本だが、綾足は、自分で新しい真名本を作り、それを古くから伝わった本のように見せかけて、それについ

ての注釈まで自分で書いている。綾足にどのような意図があったのかを考えると興味深いが、ともかくこれもまた、さまざまな『伊勢物語』の享受の、ひとつの姿であったと言ってよい。



《写真 15》

日本の古典文学の中でも、『伊勢物語』ほど長く読み続けられた作品、それも、時代によってさまざまにイメージを変えながら愛され続けた作品はない。『伊勢物語』の写本・版本、『伊勢物語』について書かれてきた数多くの注釈書類は、日本の文化の歴史とともに読み継がれ、読み替えられてきた『伊勢物語』のさまざまな姿を今に残し、現代の我々に伝えているのである。

(やまもと とくろう 文学部教授)